

# 中洲港の思い出

——瀬戸内寂聴『場所』再読

岸  
積

寂聴の連作短篇集『場所』は平成13年に野間文芸賞を受賞した傑作だ。この私小説に登場する「私」は寂聴（旧名＝晴美）その人である。生まれた時から51歳で出家するまでのことが、住んでいた場所や縁のあった地所に沿って記される。その3番目が「中洲港」だ。

大正11年、塀裏町とも言われた中洲（なかす）（現在の幸町3丁目）に瀬戸内晴美は生まれた。新町川にかかる富田橋から河口寄りに当時、魚市場があり、阿摂航路の定期船が発着していた。港は幼い晴美にとって格好の遊び場となった。「朝早く行けば、魚のせりの終わった広い魚市場の床一面が、洗われたばかりらしく、まだ濡れた床に、ところどころ水がたまっていた。／その広い魚臭い空間の真中に立つても、

誰もとがめる人はいなかった。／ふり向くと波止場には、陽光が燦燦と降り（略）朝早く着いた船が、岸壁に小山のようにどっしりと浮んでいた。」「昼間の波止場で岸壁に腰を下し、足をぶらぶらさせながら、私はいつでも夜の船出の光景を執拗に思い浮べていた。／広い河口の行手に海ははるばるとつづき、その彼方には見知らぬ都会があることを空想するだけで胸がときめいた。」

汽船の船出の汽笛の音も忘れられないと書く。「夜を引き裂くような声を絞りあげて、それは波止場から真直ぐ、私の家族の枕元まで駆け寄ってくる。夜毎のことなので、誰も驚かさず、眠りを妨げられることもなかった。私はたとい夢の中においても、汽笛の音は全身で受け取り、子守

唄のような安らぎを与えられていた。」と感受性の鋭さを見せる。

筆者（岸）は指物屋の仕事場の書き出しが好きだ。家の間口は狭いが、うなぎの寝床のように奥に長い。板の間の仕事場には父の弟子たち十人ほどがいて、鉋などが削り出した木つばで埋まっていた。うつかり気づかずにかねてに跨いでしまふと、いきなり父の曲尺が飛んできて足をすくわれる。「女だてらに道具を跨ぐなっ」

曲尺で腿を打たれた後で痛さに半泣きになりながら「ほなつたつて、木つばで道具が見えんもん。木つばの上に道具置くように若い衆に言うて」と、抗議する。舌のまわりかねる歳から、筋を通そうとして理屈を言い、反抗するのでも、「リクツヤのハーちゃん（晴美）」と呼ばれていた。

近所の下駄屋で鼻緒のすげ替えを飽きずに見ているハーちゃんもいい。初老の主人が子供好きで話し好きだった。「靴屋と下駄屋とどちらが好き」と聞くと、「鼻緒がきれいだから下駄屋」と答える。主人は「ハーちゃんも職人の子やからな」と笑うのだ。

ここで筆者は、ふいにわが父を思い出した。父は徳島市

の生まれで、祖父は地方芝居の座長。極道のあげく、小学校もそこで、父を佐古町の下駄屋へ奉公に出した。つらいことが続き、父は昭和初期、自動車運転免許を取り、転業した。ところが、「職人の子」の血が騒ぐのか、筆者もまたハーちゃん並みに下駄屋が好き。

近所の下駄屋の鼻緒のすげ替えを飽きることなく眺める小学生で、「大人になったら下駄屋になりたい」と言い始めた。それを母から聞いた父は、ひどくがっかりしたようだ。

あと一つの思い出は、晴美の中洲の家の筋向いのインマヌエル教会にかかわる。

幼い晴美は教会の日曜学校に出かけ、祭壇の灯のもと、牧師夫人のオルガンで讃美歌を歌い、幻燈会を楽しむ。教会の庭には砂場もあり、ブランコで心ゆくまで遊ぶ。小説に書かれているように寂聴は晩年に再訪するが、建物は改築され、遊び場も樹もなく、殺風景になった教会に幻滅するのである。

筆者は戦後、中学3年生になって、インマヌエル教会でメリー・バグズ牧師の英語講座に出ている。なんと兵児帯の私服に、高下駄をはいて――旧制高校の蜜カラに憧れていたからだ。秘かに愛していた下級生の女性も受講す

るので、見せたかったせいもある。

それを知った父は、高下駄をあつらえ、鼻緒を締め直して、筆者に与えた。講座の後は自転車で帰るバッグズと一緒にだが、佐古5番町の自宅へ帰り着くまで、ゆるむことのない元職人の腕と愛情を忘れることはなかった。

母の思い出は中洲港の魚市場につながる。

母は魚のせり市に出かけ、魚を仕入れると手押し車で行商に出た。敗戦直後のことだ。

父の勤めていた汽船会社が徳島大空襲で全滅、失業状態になった際、家族7人を支えるため、母が立ち上がったのである。手押し車で魚を売り、頼まれると包丁で愛想よく魚をさばいた。佐古の自宅との間を一年間往復したのだからタフであった。

母は石井町に生まれ、貧しくて12歳で東京の旅館の女中となった。英領インドからの名門留学生と恋をしたり、関東大震災の経験をしたりする青春もあったが、帰郷して17歳で父と結婚した。

免許を取って運転手となった父が、ハイヤー業を始めたのだが、最初の地が、香川県の引田町<sup>ひけだ</sup>であった。寂聴の父

の豊吉の故郷が引田町の黒羽<sup>くろは</sup>で、このことは第一章の「南山」に書いてある。これも何かの縁か。

新町川に架かる富田橋のすぐ下手の「富田港」（北岸が中洲波止場、南岸が富田波止場）は、大正11年に港湾に指定され、徳島港と呼ぶようになった。昭和5年に幸町にあった県庁が万代町の現在地（県立徳島中学校跡）に移ると、新町川を挟んだ対岸（埋め立てられた寺島川に架かっていた中洲橋の東側一帯）が「中洲」と言われるようになり、機帆船がひしめき、阿摂航路の汽船も発着する町に変わった。その港も、沖洲のフェリーターミナルに移って久しい。

だが、寂聴の『場所』を読んでいると、失われた昔の徳島の風景が二重写しになって臉<sup>おもて</sup>に浮ぶ。

新潮文庫版『場所』の解説で、現代詩作家の荒川洋治は次のように評している。「……どの章においても人間の思いと、できごとを余すところなく心を尽くして描いており、暗い場所も、花が咲くように明るい。ぼくは『私』のつらさやさみしさなど忘れてよみふける。」

そうだ。筆者も、そのようにして愛読者となった。

〈敬称略〉